

《みちのくの玄関口》から東京と東北をつなぐまちへ 歴史文化と先端産業が融合する魅力的なまちづくり

大震災から9年目を迎えて

取材のため白河市入りしたのは、令和2年3月11日(市長へのインタビューは翌12日)の午後。図らずも東日本大震災から丸9年の当日だった。

例年なら震災復興関連の多彩なイベントが催される日でもあるが、レトロな木造駅舎(JR白河駅・大正10年築)を出てすぐ右側に整備されたイベント広場にも、隣接する市立図書館(りぶらん)や白河文化交流館コミネス周辺にも、あまり人の姿がない。

JR白河駅はもともと、名城・小峰城こみねの城内だった場所に建設された。そのためホームからはもちろん、駅周辺からはほぼどこからでも、平成3年に再建された白亜の三重櫓さんじゅうりょうぐら(天守に相当)や長大な石垣などが一望できる。

この白河駅と小峰城および小峰城歴史館、駅に隣接するイベント広場、りぶらん、コミ

ネス、さらに姉妹都市・コンピエーニュ市(フランス)との交流を記念して造られたコンピエーニュ広場などを結ぶ回遊散策コースは《新しい文化の回廊》として、観光客に人気のエリアだ。白河市が展開する「歴史まちづくり」の核の一つ、旧城下町の構造と景観を色濃く残すオールドタウン(中心市街地)とは対を成す存在であり、観光シーズンにはどちらにも多くの人が見られる。

また、震災復興関連のイベント時にはメイン会場となるエリアでもあり、毎年3月11日にはかなりの数の参加者が市内外から詰め掛ける。ところが昼下がりの白河駅周辺には、うららかな日差しとともに、静かな風景が広がっていた。

「本来ならコミネスでは昨日(3月11日)、『第23回しらかわ音楽の祭典・第8回震災復興音楽祭』が開かれ、同時に隣接するりぶらん駐車場を会場に、福島県の7カ所あかで灯りをともす『3・11ふくしま追悼復興祈念行事・キャン

鈴木和夫
白河市長



ドルナイト』も開催される予定でした。しかし、新型コロナウイルスの影響で、イベントは軒並み中止となり、施設も休館中です。

震災の翌年から続けてきた行事なので、私たちとしても大変残念です。しかし、感染の拡大防止を図り、市民の皆さんの健康と安全を守るため、致し方ないことと割り切るしかありません」



日本100名城にも選出された小峰城の三重櫓は外国人旅行者にも大人気

そう淡々と語る鈴木和夫白河市長が就任したのは平成19年7月。旧白河市と表郷村・大信村・東村との合併(平成17年)から2年目に、成井英夫前市長の逝去を受け急ぎよ出馬し、初当選した。現在4期1年目だが、鈴木市長は行財政改革を基盤に精力的な市政運営を進めていた1期最終年に、東日本大震災に遭遇した。

以来、白河市の震災復興事業をけん引。福島第一原子力発電所の事故に伴う数々の事後処理にも、絶えず直面してきた。

大震災から9年が経った、今年3月11日現



大正4年築の白河ハリストス正教会聖堂(県指定重要文化財)は旧城下町の中心部に所在

在の復興庁から発表された震災後の「避難者の状況(現況)」によると、現在も約4万7千人が、全国972の市区町村に在住し避難生活を送っている。さらにそのうちの4万人強が福島県民で、今も3万人以上が県外で暮らしつつ、帰郷の日を待ちわびている。

この事実一つを取ってみただけでも、東北地方の中でもとりわけ福島県の復興は、まだ終わっていないといえる。

「白河市は、津波被害のあつた沿岸部を除けば、内陸部で最大の15人もの尊い命が犠牲となるなど、甚大な被害が発生したことは、東北以外の地域ではあまり知られていません。15人のうち13人は、葉ノ木平地区で起きた大規模な土砂崩れによる犠牲者でした」(鈴木市長)



「中でも『緊急重点事項』として積極的に推

創造的産業振興を力強く推進

白河市は福島県内で最大の震度6強を観測。白河駅に近い葉ノ木平地区では延長約130m、幅120mにわたる山崩れが発生し、10軒の住宅が瞬く間に土砂に埋もれた。土砂災害による人的被害としては東北地方でも最大だ。さらに3000棟を超える建物の全・半壊、水道の17日間断水、国道289号など幹線道路の寸断による通行止めに加え、福島第一原発事故に付随する風評被害にも悩まされた。

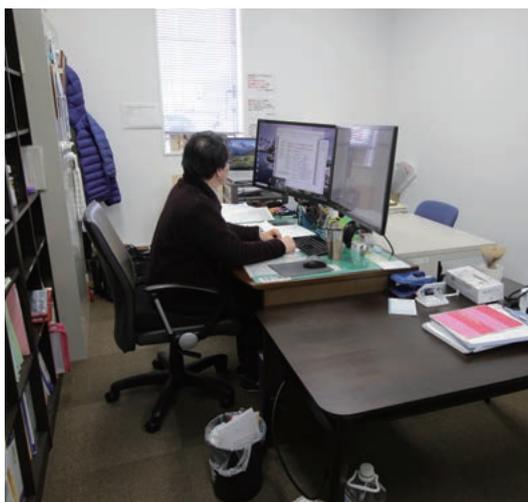
そして震災発生から9カ月後、平成23年12月に策定された「白河市震災復興計画」に基づき、復興事業が総合的かつ多角的に、推進されてきた。



古代から白河の名を全国に知らしめてきた「白河の関」

進してきた取り組みは、《原子力災害への対応》《被災者の生活支援》《社会生活基盤の確保》の3点です。これらの取り組みはおおむね順調に進み、現在に至っています。しかし、被災からの本当の意味での復興には、こうした緊急かつ優先的に行うべき重点施策（復旧事業）の実施に加え、その先の未来（新たな飛躍）を見据えた、成長戦略としての『創造的復興』に向けた取り組みが欠かせません。

具体的には産業振興による雇用機会の創出、子育て支援の推進、地域のつながりの強化（コミュニティ再建）と高齢者の元気づく



産業支援センター内にあるインキュベーションルーム

り、地域アイデンティティを醸成するためには不可欠な歴史と文化を活かしたふるさとづくり、災害に強い道路網の整備などです」（鈴木市長）

創造的復興のうち、地域振興に不可欠な「産業振興による雇用機会の創出」について言えば、白河市は震災前から首都圏に隣接する企業立地の好適地として、各方面から注目を集めていた。

例えば白河市は古代から、歌枕として著名な「白河の関」の存在もあって「みちのくの玄関口」という形容が長く定着してきた。それは、白河の関が東北と関東の間にある関所だったからだが、現代の地理感覚からすると、白河市は東京（首都圏）と仙台市を中心とする東北地方を結ぶ結節点という形容の方がしっくりくる。

また、東北新幹線・新白河駅、東北本線・



白河文化交流館コミネスの大ホール

白河駅、東北自動車道・白河IC、白河中央スマートIC、西郷BSの存在が象徴する交通の要衝ぶりなどが評価され、震災前から注目されていた白河市への企業立地は、震災後も順調に推移してきた。

「まだ東北全体が先行きの見えない不透明感に覆われていた平成23年9月、震災前から白河市内の工業団地「工業の森・新白河」への進出が決まっていたインターネットサービス大手・ヤフー株式会社の『白河データセンター』建設の起工式が行われ、第1期工事が始まりました。今思えばあれが創造的復興の幕開けとなり、市民にも行政にも、大きな勇気を与えてくれる事例となりました」（鈴木市長）



東日本大震災による崩落から復活した小峰城の石垣

白河データセンターの敷地は約4万5千㎡と広大だったが、延べ床面積約6千㎡の1号棟・2号棟が、起工式の翌年、翌々年に相次いで完成。さらに3号棟建設を挟んで平成28年には4号棟まで完成、敷地も約6万7千㎡に拡大された。現在では5号棟（1万1千㎡強）も完成しており、東日本最大のデータセンターとして機能している。

「それを皮切りに、これまで多様な業態を持つ企業の進出が続いています。昨年11月には三菱ガス化学株式会社の子会社・MGCファームックス株式会社による国内最大の

《野菜工場》が完成しました」（鈴木市長）

三菱ガス化学は平成24年にヤフーと同じ「工業の森・新白河」に進出していたが、平成29年、グループの新たな製造・研究開発拠点として同団地内に《QOLイノベーションセンター白河》を建設。グループ会社・MGCファームックスによる野菜工場も同センター内に建設された。

LED（完全人工光）活用野菜工場として国内有数の規模を誇る。1日当たり2.6t（約3万2千株）のリーフレタスの収穫が可能。同工場は、地元雇用の面で既に100人以上の採用を実現している。

さらに、首都圏と東北地方を結ぶ交通の要衝という白河市の地の利に注目する企業からの問い合わせは、引き続き盛んだ。

市民が待望した小峰城の石垣復旧

「工業団地を中心に相次ぐ大企業の白河市への進出は、雇用の拡大だけでなく、地元企業にもさまざまなメリットがあります。例えば平成21年3月に白河市が中心となり、しらかわ地域（白河市、西白河郡、東白川郡）の自治体等と共同で設立した《産業サポート白河》を窓口として、進出企業とのマッチング事業や企業見学会のほか、人材育成のための講習会や女性向けの起業セミナーの開催など、地域経済や企業の活性化のための企画を多角的に実践しています。そうした活動から刺激を

受けた若者や女性の新たな発想に基づく起業への機運や産業創造は、これからの白河市や定住自立圏を構成する『しらかわ地域（福島県県南地域）』の発展、活性化に大きく寄与してくれるものと期待しています」（鈴木市長）

産業振興を目に見える創造的復興とすれば、市民の心に訴求する無形の力を持つのが、歴史文化を活かしたふるさとづくりだ。

「東日本大震災の被害は、本市のシンボルである小峰城跡にも及びました。特に石垣は10カ所にわたって崩落し、その面積は1500㎡にも達しましたが、市長になってすぐに文化財指定の準備を進め、平成22年8月に国史跡の指定を受けていたことが幸いし、文化庁の全面的な支援の下、平成23年12月から復旧事業を開始、約8年を経て、平成31年春にようやく修復が完了しました。

石垣の崩落と復旧に至る過程では、市民の小峰城に対する尊崇の念や、心の支えとしての存在の大きさに改めて思いを致しました。白河市では平成23年2月に歴史的風致維持向上計画の認定を受け、同年4月から歴史を活かしたまちづくりに取り組み考えでしたが、その矢先に東日本大震災が発生。小峰城の石垣復活への着手が、結果的に事業の出発点の一つとなりました。

また、大震災からの復旧・復興事業は多方面に及びましたが、市民の思いを一つにして、この困難を乗り越えたという意味で、小峰城の石垣復活への歩みは最も大きな力を発



南湖神社(祭神・松平定信)の入口に鎮座する松平定信像

揮したと考えています(鈴木市長)

小峰城の石垣が震災で崩落した事実は、年齢を問わず、市民の心に衝撃をもたらした。駅からも見える小峰城の石垣は日常的風景。江戸時代の初めから400年近く続く「当たり前の存在」でもあった。それだけに崩落して初めて、失われたモノの大きさに気付かされた。さらに復活していく過程をつぶさに見守ったことで、愛着が改めて強まったという市民の声が、市役所に多く寄せられたという。また小峰城の石垣の復旧工事には、崩落した石の一つ一つに番号を割り振り、文化財調査を実施した後に「石材カルテ」を作成。崩落前の写真を参考に、元の場所に戻すなど伝統工法を採用し、文化財石垣として、以前と変わらぬ姿に復旧したのだ。

この取り組みは、東日本大震災からほぼ5



多くの来訪者に親しまれる、国指定史跡・名勝「南湖公園」

年後の平成28年4月14日に発生した熊本地震で崩落した、熊本城の石垣の修復にも参考とされた。震災により、人命を含め多くの大切なモノ・コトを失った市民の喪失感を少しでも埋め合わせるとともに、その経験が他の地域の復興にも役立つという意味で、小峰城の石垣の復旧もまた、白河市の《創造的復興》の一翼を担っているといえるだろう。

創造的復興後の未来のカタチ

「また昨年10月には、福島県内だけで32人の犠牲者を出した台風19号がありました。白河市でも2人の尊い命が失われ、建物の全半壊66棟、床上・床下浸水74棟、道路は

178カ所で寸断、河川は156カ所で決壊などの被害がありました。それらの被害からの復旧もまだ終わっていませんが、震災や豪雨被害などに遭うたびに改めて思うのは、白河市の偉大な先達者である松平定信公が残された教えです。

松平定信公は陸奥白河藩主の地位にあったときに、幕府老中として『寛政の改革』を断行されました。その際には、あまりにも厳しい儉約主義が庶民の反感を買ったともいわれていますが、幕府の財政を立て直しを実現しただけでなく、定信公が江戸で始めた七分積金(緊急時のための積立金)は、明治維新の段階で巨額に達しており、東京の近代化に大きく貢献したという歴史的事実があります。それらの財政手法は皆、陸奥白河藩主として行った財政改革の手法でもありました。

ご承知のように、天明の大飢饉の際には、東北地方の諸藩が数万人規模の餓死者を出したのに、白河藩領からは一人の餓死者も出なかった。それは、定信公が飢饉に直面して対策を行った賜物でした。寛政の改革では、その経験を大量の囲米(備蓄米)と七分積金をセットで行うという形で活かし、その後起きた天保の飢饉では、被害を大きく減らすことができました。定信公はこのように常に緊急時への備えを怠らなかつたばかりか、身分制度の厳しい江戸時代にあつて《士民共楽》という理念を掲げ、自分の差を超えて人を慈しむ仁政を行ったのです(鈴木市長)

白河市

市 政 ル ポ

(福島県)



国道294号白河バイパスのトンネル工事現場(南湖裏)

白河市の観光名所・南湖公園は、武士と庶民が共に楽しむ(士民共楽)という松平定信の理念の下、水利開発と貧困者救済(貧困者が工事に従事)など、多くの目的を兼ねて築造され今に至る、美しい自然公園だ。定信の非常時対策・貧困者救済の思想を基盤に蓄えられた七分積金は、明治時代初期に東京府で実現した、近代最初の貧困者救済用社会福祉施設・養育院(現東京都健康長寿医療センター)の設置にも役立てられた。その運営に力を尽くしたのは、定信の七分積金制度などに感銘を受け、終生敬愛した渋沢栄一だった。

倏約という措置が単なるコストカットのための事業でなく、多様な利益、人々の幸せにつながる仕組みの《元手》をつくるための事業と発想されているところに、定信の先見性、事業の普遍性が端的に表れている。まさに



今年5月11日から交付開始され好評の図柄入り白河ナンバー

《創造的復興》の基盤を成す理念といえる。そして今、白河市においては、創造的復興から派生し、未来のカタチを指し示すような《芽》が次々と始めようとしている。

中でも注目されるのは国道294号白河バイパス(以下、白河バイパス)の整備事業だ。白河バイパス整備事業は、城下町特有の折れ曲がりの多い市内道路網、阿武隈川を挟み並行する形で延びる東北自動車道、国道294号および289号などに縦軸を通し、一気に最短距離で結ぶ計画だ。その効果は「中心市街地の活性化や交通の利便性、防災機能の向上、物流の効率化、安全な歩行空間の確保など多方面にわたり、県南地域では現在最も重要視されているバイパス計画(数年後の供用開始)」(鈴木市長)である。

江戸時代、いわゆる奥州街道は、江戸から



白河市を貫流する大河・阿武隈川

白河を経て、仙台・青森方面へ続く当時の国道だった。福島県内では現在の国道4号に当たるが、東北自動車道も並行している。それに対し国道294号は、白河から分岐する脇街道(バイパス)・旧白河街道(白河・会津若松)を活用して整備された。どちらにも共通するのは、東北や越後方面と江戸を結ぶ大名の参勤交代や物流、旅人の往来などに盛んに利用されたことだ。

白河バイパスはそうした歴史の積み重ねの上に新たに計画された。同時に白河市を創造的復興から次のステージ、新たな未来地図を描くために通される、画期的な「現代のスーパー脇街道」ともいえるのではなからうか。

白河市のさらなる創造的復興の成果と、その先の新たな展開が注目される。

(取材・文〓遠藤隆／取材日 令和2年3月12日)